



「天文学者はロマンティストか？」

知られざるその仕事と素顔

縣 秀彦

日本放送協会出版社 定価 700 円＋税 213 頁

読み物
お薦め度
☆☆☆☆

まずは、本書の帯の文句に驚く！「彼らがいないと 生きられない (かもしれない).」とある。これは必見 (かもしれない)。しかし、この帯の文句は、裏を返せば、本書の冒頭にも触れている「天文学は必要か」という問いにつながる。

そして、思い出したのが、昔、大学院生だった頃に参加した天文天体物理若手の会夏の学校の「天文学と社会」という分科会。「天文学はなんて役に立つんだ」というテーマで、「役に立つ」「いや実は役に立たない」と、若手同士が意見をぶつけあった。今でも、「天文学って何の役に立つのか？」とは必ず人から聞かれる質問とっていい。

著者は、国立天文台の常勤研究者の中の唯一の教育学博士であり、天文教育センターで天文学の普及と広報の仕事にかかわっている。そんな著者自身の天文教育・科学教育分野での実践を背景に、一環して「天文学と社会とのかかわり」を意識した一冊となっている。「天文学者はどんな人か?」「天文学者は何をしてきたのか?」「天文学は今、何に役立っているのか?」「天文学は今、何を目標しているのか?」「天文学者になるには?」と問いを投げかけ、その各問に対し、1 章ずつを割り当てて、回答する構成になっているのがおもしろい。

例えば、「天文学者はどんな人なのか?」では、現在、天文学の最前線で活躍する 4 人の天文学者を取り上げ、サブタイトルにもある「知られざるその仕事と素顔」をまさに紹介している。「天文学者は何をしてきたのか?」では、ガリレオ、コペルニクス、ニュートン、アインシュタインとわれわれもよく知る科学者たちが登場し、天文学者が歴史の中でどう貢献してきたかを 50 ページほどでレビューしている。「天文学は今、何に役立ってい

るのか?」では、天文台への問い合わせの多い質問を題材に暦に関する裏話、そして宇宙開発の現代社会への貢献を取り上げている。「天文学は今、何を目標しているのか?」では、「地球外生命」「ブラックホール」「宇宙の始まりと果て」に絞って、最新天文学の動向に触れている。実際これらの話題は、われわれにとってもよくされる質問でもある。天文学を研究しているというだけで、ブラックホールのことを質問された人は多いはず。「天文学者になるには?」では、天文学者だけでなく、サイエンス・コミュニケーターの仕事にも触れ、天文学の成果を一般普及する重要性を主張している。このように、どの話題も「社会とのかかわり」を強く意識して書かれている。

さらに、「天文学と社会」の章を中心に、最近のトピックである「宇宙図」「アストロノミーパブ」「小学生の 4 割は『太陽が地球の周りを回っている』と考えている」など、著者ならではの話題・主張がふんだんに取り上げられている。特に「冥王星騒動」に関しては、世間の関心の高さに触れて、日本人が天文学好きであることを示している。これらから、「天文学は『みんなの科学』である」と著者は結論している。これは「天文学は必要か?」に対する著者の一つの答えであろう。

本書は単なる天文学を学ぶ啓蒙書とはひとくち違った切り口の天文学入門書となっている。天文学を志す中高生たちにぜひ読んでほしいし、天文学を勉強したい人・研究したい人・天文学者がどんな人か知りたい人にもぜひ読んでほしい。われわれ天文学を研究するものも、「天文学は必要か?」という問いに答える一助になるだろう。

矢治健太郎 (立教大学)